

## 乳児股関節超音波検診の開設

山田 尚武、 北田 一史、 甲斐 史敏、 竹中 孝、  
成田 渉、 石橋 秀信、 長谷 斎武  
(みどりヶ丘病院 整形外科)

### 【目的】

近年、発育性股関節形成不全 (Developmental dysplasia of hip:以下 DDH) は患者数が減少している一方、一般的の乳児検診では発見されない見逃し例が問題となってきた。2015年1月以降、当院で出生した乳児に対して、乳児股関節超音波検診を開始した。今回の目的はその成績を検討することである。

### 【方法】

対象は2015年以来エコー検診を行った男児204例、女児170例、748関節、検診時平均日齢は110日であった。エコー検診ではGraf分類を用いて分類し、Graf type II以上に対しては、二次検診として単純X線像を撮像した。

### 【結果】

Graf type I以外は20関節あり、その全てに単純X線像を撮像した。二次検診の中で股関節脱臼は4関節、臼蓋形成不全は8関節、異常なしは8関節（偽陽性率は40%）であった。

### 【考察】

DDHの症例数に減少に伴い、整形外科医が検診などに関与することが減ってきている。今回、われわれは新たに超音波を用いた乳児股関節検診を開始した。脱臼例を発見はできたが、整形外科一人で行っているため、超音波検査士などと協力し、拡充が望ましい。また、近年では新生児突然死症候群予防のため、仰臥位就寝を促進するようになり、向き癖および斜頭を生じている症例が散見される。向き癖は、体幹の傾斜を引き起こし、片側下肢が内転位となり、DDHの誘因となりうる。今後は、検診活動だけでなく、向き癖予防および抱き方指導などの、DDH予防活動にも力を入れていきたい。

### 【結論】

乳児股関節超音波検診を開始し、DDHを発見することはできた。今後、より検診活動を拡充し、DDHの予防活動にも尽力していきたい。